

母と娘の労苦物語

福島県 藤田洋子

一 まえがき

一家が満州に渡ったとき、私は生後四カ月でしたから、満州での實際の苦勞の話は母の記憶によるものです。母は九十歳も半ばとなり、足腰は弱く、耳も遠くなりましたが、まだまだ氣力だけはしっかりしています。

私には母の記憶だけが頼りです。母が淡々と語ってくれた半世紀前のあの苦勞を、あの戦争がもたらした悲惨な事実を、後世の人々に残したいという母の思いを叶えたいとまとめたものです。

二 母、ヨシの思い出話

私の故郷は、現在の郡山市大槻町です。家は土地を借りて細々とした饅頭屋をしており、私が売りに歩いていた。また、あるときは農家の手伝いに雇われ

たりして生活していましたが、子供が次から次と生まれて、生活はだんだんと苦しくなりました。それに物資統制の時代となり、砂糖の配給も乏しくなり、思うように商売もできなくなってきました。そのころ、町から満蒙開拓団として満州に行った人があり、その人の話から開拓団の評判が大変に良く、次々と多くの人たちが満州に向かって行きました。

満州に行けば、十ヘクタールの土地が与えられるという話でした。それに、以前は治安も不安で危険もあったが、今は心配もなく、物は何でも豊富にあって安いということ、大勢の子供を育てるにはもってこいの所だと、夫と話し合いました。

それよりも、自分の土地を持たない我が家にとつては、十ヘクタールの広い土地を持てるということは、何よりも魅力でした。

子供たちが大きくなったら働き手も多くなり、農業は楽しみだと思いました。夫は、農業の経験が無くて、向こうで饅頭屋を開けば生活はしていけると言い、夫婦で勇氣を出して大決心をして海を渡ったの

は、昭和十七年の九月でした。

当時、夫の一二は四十四歳、私ヨシ三十八歳、長男の一郎は十九歳、長女チヨ子は十七歳、次男の秋夫十六歳、三男の吉秋が十四歳、次女のアイ子は九歳、三女キミ子七歳、四男の吉夫が二歳、そして四女洋子は生後四カ月でした。

家族十人が外国に引越しをするということは、命懸けなのに、何も知らない子供たちは喜んでいました。まったく、親の心子知らずというところでした。

行き着いた所は、筆架山開拓団でした。

最初は本部での共同生活でした。予想していた生活ではなく、後悔が日に日に募るばかりでした。

ご飯は粟や大豆や麦ばかりでまずく、砂糖などは無いと聞いて、夫は期待していた商売ができないと落胆してしまいました。それになによりも驚いたのは、人の心が荒れているということでした。食堂に行っても大豆ばかりのご飯を食べるのも悲しいのに、若い男たちは寄るとさわると「ぶっ殺すぞ！」などと、訳の分からぬことをどなり散らすので、若い女や子供たちは、

恐くて恐くて暗いランプの下で震えていました。

どうしてこんなに気が荒いのか、満州の気候のせいかとも思いましたが、金も物も不足し、閉の経営が苦しくなって、人の心もずさんでいたのです。

団長さんは敵しい人でしたが、副団長の評判も悪く恐ろしい人でした。

夫はもともと体が弱く歯も悪かったので、粗食に耐えられずに体調を崩してしまい、頼りになる親しい人も無く、初めての満州の敵しい冬はやっと越しましたが、待望の春を迎えた昭和十八年三月二十八日、四十五歳で死んでしまいました。

渡満して半年、まだまだ寒い大陸の地で、私は多くの子供を抱えて、生きてゆかねばならない身の重さを嘆きました。しかし、いつまでも悲しんでばかりもおれず、小さい子を大きい子にお守りをさせて、給食当番や畑仕事に励んだのです。筆架山周辺の地の平坦なものには驚きました。太陽が地面から昇って地面に沈んでいく様は、歌のとおりでした。

昭和十八年の六月に、長男一郎が徴兵検査で佳木斯

に行きました。徴兵検査が終わっても団長さんから佳木斯に残るように命ぜられたのです。それは、団に届けることになっていた種ジャガイモが、何かの不都合からか遅くなり、種にできなくなったので、その多量のイモを処分する仕事をするためでした。作業が予定より長くなり、食べ物も無くなったので、一郎はそのイモを煮て食べたりしていました。また、小さい弟妹たちにお土産のつもりで三十本ほど買っておいいた羊羹を食べたところ、何が悪かったのか腸チフスにかかり入院したのです。でも大丈夫だからと聞かされていたので、一度も見舞いにも行かずにいました。

それが、七月十日に急に容体が悪くなったと知らされて、私は洋子をおぶって三男の吉秋と一緒に、佳木斯の病院に駆け込んだときには、もう言葉を交わすこともできないほどの重体でした。七月十二日に、一郎は二十歳の若さで亡くなりました。

病院の窓から見える丘の上で焼いてもらい、お骨を持って家族の元に帰ってきました。一番の頼りであった一郎を亡くしてしまったことは、私の一生で一番の

失望でありました。

眠れぬ夜が幾晩も続きましたが、でも私がしつかりしなければ一家はどうなるのかと、気を取り直しました。それから十八歳のチヨ子が頼りでした。

当時、次男の秋夫は気が荒く、私の言うことを聞かないひねくれ者で、親の私や姉のチヨ子に対して、往復びんたや殴る蹴るなどを平気でする乱暴者でした。この子には頼れない、絶対に頼りにするものかと、強く胸のうちに思ったときの切なく悲しかったこと。チヨ子と抱き合って泣きました。十五歳の三男吉秋は、秋夫とは正反対の性格で、優しく働きの者でした。満人にも平等に付き合い、紙が無くて困っている満人に古本などを持って行き、喜ばれて甘瓜や西瓜をたくさんもらってきたりしていましたし、弟妹たちからも一番好かれていました。

部落周辺の土地は、とても肥沃で肥料を使わなくとも作物は良く育ち、昨日芽が出たばかりでも、今日行ってみるとぐーんと伸びているのには驚きました。ジャガイモやカボチャのおいしいこと、土地の良さを実

感しました。広野に咲くいろいろな花の美しいこと、日本では見られなかった、何というすばらしい情景でしょう。

共同生活にも慣れてきましたが、若い男たちは満人をはじめのりです。無抵抗な満人を理由もなく乱暴している姿を見るたびに、胸が痛みました。

昭和十九年の秋も深まった十一月、共同生活から離れて、ようやく十ヘクタールの土地が与えられました。遅く渡満したので一番奥地になってしまい、本部からも遠くになり、子供たちが国民学校に通うのにも大変でした。履物の配給も乏しく、朝作ったばかりの草履をはかせても乾燥が激しいので、学校から帰って来るまでに半分ほどに擦り切れてしまうのでした。井戸を掘ってもなかなか水が出なくて、三十メートル程の深い井戸で水をくみ上げるのも重労働でした。

そのころ、私には忘れられないことが起きました。近所に住んでいたある奥さんが、着物が無くなったと言って私を疑いました。本部から警備指導員が来て、「お前さんが盗んだらう」と、何時間も厳しく調べら

れて、家の中を引っかき回されました。私は彼女に「自分の物は分かるだろうから、どこでも捜してくれ！」と言いましたが、その間、外に立ち通しでした。女所帯だから馬鹿にしてと、悔しくて悲しくて、あの時の屈辱はいまだに忘れることができません。

昭和二十年、初めて自分の土地を耕せる喜びに胸がいっぱいでした。今年こそは増産をして生活を安定させようと思い、春の訪れと共に、吉秋を先頭にして一生懸命に農作業に打ち込みました。

春の日は、あつという間に過ぎて、六月には十九歳になった秋夫にも召集令状が来て、送り出しました。部落の男たちにも次々と召集が来て、兵隊に行っていました。

このころ、食糧も少なくなつて、子供たちに食べさせることも大変でした。第二部落の山田さんは、同じ大槻町の人なので頼みに行きました。山田さんは、快くトウモロコシ・俵を貸してくださいました。私は嬉しくて嬉しくて拝みました。この時のこの親切を、まだ山田さんにお返ししていないことを忘れていませ

ん。必ずお礼をしたいと思っっています。

しかし、せっかくお借りした大事なトウモロコシなのに、一粒も食べないままになってしまったのです。

八月十一日に、突然、避難命令が出たのです。馬車に荷物を積んで家族七人で出発しました。まだ家が見える所なのに荷物を半分ぐらい捨て、身軽になって歩き続けていたら、よその部落の人が何も持たずに歩いているのです。すると「ソ連兵が近くまで来ているぞ！」と叫んでいるのが聞こえました。

急いで骨壺を捨ててお骨だけを風呂敷に包み、腹にしっかり巻きました。荷物を積んだ馬車ごと満人にあげました。さっき捨てた荷物も拾いながら喜んで持って行きました。それから間もなく、鈴木時栄さんが満人に殺されたという恐ろしい情報がありました。日頃満人たちをいじめていた人が、仕返しされたのだと思えました。

もう焦って焦って先を急ぎました。第五部落だけが遅かったので、知らない人たちの列に加わって家族七人は歩きました。そのうちに足の軽い吉秋は、先に行

ってしまい見失ってしまったのです。

八月十二日、避難民を乗せて南下してきた日本軍のトラックに、兵隊さんが素早くアイ子、キミ子、吉夫の三人の子供を乗せてくれたのです。このトラックは依蘭に行くと言うので、私は洋子をおぶってチョ子と歩き出しましたが、間もなく依蘭には敵が入って火の海だとの知らせが入り、どっちに行けばよいのか分からずに、みんなの進む後について無我夢中で歩きました。トラックに乗せた三人の子供たちは、どこに行ってしまったことか会うことができませんでした。まだ五歳だった吉夫はかわいい盛りでした。少しでも私の姿が見えないと、「かあちゃん、かあちゃん！」と叫んでいた子だっただけに、どんなにか母を恋しがって泣いているだろうと、不憫でなりませんでした。どこに行ってもまず最初に人ごみの中を夢中で捜しました。

長々と続く避難民の列は、ソ連軍の飛行機が来ると道路の両側の畑の中に隠れ、行ってしまおうとまた列を作って歩き出しました。歩けない者はどんどんと遅れ

てしまいました。大きなお腹を抱え背中に赤子を背負って、両手に泣きじゃくる子供の手を引いた母親が、「だれか！この子を殺してちょうだい！」と泣き叫びながら歩いている姿も見ました。

道路を歩くのは危険になり、日中は山や草の中に身を隠し夜になって歩きました。雨が降っても、野宿の明け暮れでした。もう何口もどこを歩いているのかもわからずに、泥水を飲み、畑でカボチャを見つければそれをかじり、満人に追いかけては無我夢中で逃げたりしました。もう日本人のほかは、全部が敵でした。

草に伏したり川柳の下に潜んだり、夜、敵が近づいてくれば息を殺し、「子供を泣かすな！」と言われ、泣けばその口をふさいでじっとして過ごしました。あまり長い時間そうしていたので、子供をそのまま死なせてしまった人もあり、悲惨なことばかりでした。道も無い山や湿地に、多くの人が踏み込んだので道ができてしまいました。

至る所に歩けない老人や子供が置き去りにされて、

泣いている者、うずくまっている者をたくさん見ましたが、そこを通りかかる人たちも声をかける気力さえもなく、黙々として通り過ぎていくのみでした。

ある日、みんなからもはぐれてしまい、私はチョ子と洋子の三人で葦の茂った中に潜んでいたところ、吉秋がひょっこり顔を出したのです。どこをどうしてきたのか、会えたのです。その時、十七歳の吉秋は軍服姿でした。どこをどうやってここに来たのかと聞く間も無く、遠くに日本兵の列が行くのを見つけた吉秋は、「かあさんたちを当てにしないから！」と言いなから走って行ってしまったのです。私は「行ってはいけない、一緒にいろ！」と叫んだのですが、行ってしまったのです。それっきり吉秋には会うことはできませんでした。明るくて優しい子だったのにと、元氣だったあの子の声が今も耳に残っています。

それから間もなく、第五部落の人たちに会うことができたのです。これからは絶対に離れまいと一緒に歩きました。

ある日、山の中に畑があり満人部落が見えました。

佐藤泰秋さんと源四郎さんの二人が、「食糧を探してくる」と言つて銃を持ち、小屋に向かつて行つたのです。すると間もなく、ズドーンという銃声が響いたのですが、二人は出てきませんでした。殺されたと分かるのみならず、みんなは慌てて逃げました。それからどれほど遠くの、何という所か分からない所まで逃げて、避難民の行列に追い付いて一緒に歩きました。

チヨ子は子供が大嫌いなので、洋子はなかなかつかず、それに恐怖の連続でビクビクして泣いてばかりいて、私の体から離れない子だったので、どんなに苦しい中でも、洋子を捨てたりすることはできませんでした。

どれぐらいたつたのか、九月ごろになっていたと思いますが、どこか何という所かも分かりませんが、役所のような場所だつたと思います。夕方になるし、食べ物無しでどうしたらよいかと思案していましたが、中国人が数人、私たちの周りに集まってきました、何を言っているのかよくわからなかつたのですが、「おれのところはこれだけ」というようなことを言つて、

それぞれ日本人を連れて行くのです。チヨ子は三人の日本人と一緒に連れて行かれました。私は子持ちだったので最後まで残つてしまいましたが、五人の女たちと一緒に連れられて行きました。

連れて行かれた所は、村でも裕福な家らしく、兄弟三夫婦が住んでいる中国人の家でした。私たち七人の日本人を快く養ってくれたのです。洋子もその家の人たちにかわいがられて、みんな家族同様に親切にされて、寒さも、ひもじさも覚えずに一冬を越しました。

春になって畑仕事の手伝いをしましたが、改めて大陸の土地の豊かさ、美しさを知りました。豊かな中国人の心のおおらかさ、優しさがありがたくて忘れられません。あの時の中国人家族の方にはいつまでも感謝をしています。

日本に帰れることを聞き、別の家に世話になっていたチヨ子を引き取りに行つたところ、チヨ子は熱病で寝込んでいたのです。それでもみんなが日本へ帰るなら一緒に帰りたいと言うので、歩けないチヨ子をやつのこと支えながら馬車に乗せました。私たちがお世

話になっていた家のご主人が、馬車で勃利まで送ってくれたのです。昭和二十一年五月五日のことでした。

勃利の街の小さな収容所に入りました。そこでチョ子は少しずつ元気になりました。それからしばらくして、別の収容所に移りましたが、そこは大きな場所です。いぶん大勢の人たちが生活していました。そこは食べ物が悪くて、みんな消化不良を起こし、外は一面に排泄物で汚れていました。

夜は、すし詰めで隙間もないくらいの状態で、男も女も老人子供も一緒になってのごろ寝です。暗くなるのとソ連兵が入ってきて、寝ている上を大きな靴を履いたままで渡り歩くので、小さい子が踏みつぶされて死んだこともありました。

若い女を見つけては引きずり出して、外に連れてゆき、張り倒しては犯していくのです。そうされた人たちは、頭や背中が汚物にまみれて、哀れな身にむせび泣きながら戻ってくるのです。ソ連兵が怖くて恐ろしくて、夜になるのがたまらなく嫌でした。まさに生き地獄とはこのことを言うのだらうと思いました。

チョ子は、髪を切り丸坊主にし、顔には鍋のすずを塗り男の子のように変装しました。また、ソ連兵は子供の泣き声を嫌うことを知ってからは、嫌がる洋子をチョ子に預けてわざと泣かしたものでした。

チョ子も私も、幸いにもこの難を逃れた運のよきには、天の神様に感謝するばかりでした。日本にいつ帰れるのかと待ちわびながら、何カ月も過ぎました。

やっと待望の引揚げの話が具体的にになり、南に向かつて下ることになりました。

牡丹江駅に来たとき、何十人も日本の兵隊さんが小高い所に並ばされて、中国兵に次々と銃で撃たれ、倒れていく場面を見たときには、残酷さ、非情さに悔しくて、日本は負けたのだから仕方のないことなのかと思いつつ、みんなで声をあげて泣きました。

九月になって、やっと壘盧島から日本の引揚船に乗ることができました。四年前、家族十人で希望に胸を膨らませて満州に渡ったこの海を、今、何もかも失った哀れな母娘三人となって、再び日本に向かうこの悲しさ。どこにいるのか生死の分からない四人の子供た

ちとも、永遠の別れかと思うと、遠ざかって行く中国大陸を見つめて泣けて泣けて仕方ありませんでした。黒ずんだ蒼い海原に飛び込んで溶けてしまったら、どんなに楽だろうと思ひながら見つめていました。どのくらいの時間が過ぎたのか、ふと何かの気配に振り向くと、洋子が私をじっと見つめていたのです。とっさに洋子を抱きしめて、我が身のしぶとさをのろい、また、泣きました。

船の中の食事の量が少なくて、おながへって仕方がなく、食べることばかり頭に浮かんでいたことを思い出します。

実家のある人たちは、日本に帰ったらおなかいっぱい食べてゆっくり休むのだと、喜々として話し合っていました。私には帰る実家も無く、兄弟たちも子供が多くて余裕など無いはずだし、厄介者が生きて帰ってきたのかと、喜ばれないことは分かり切っていました。

昭和二十一年十月八日の夜、郡山駅に着きました。

大槻町には、義姉（夫の姉）の家がありました。義

姉には子供もなく、夫婦だけでしたので、一間を借りてチヨ子と二人で日雇いなどをして働きました。

兄の家は農家で、そこに朝から晩まで手伝いに行きました。お金はもちろん、野菜の一つももらえずに、本当に貧窮な生活でした。私には一握りの土さえも無いのだと、切ない日々でした。

それからしばらくして、開拓村に入植できることを知り、早速に申し込みました。その説明会のあった本宮幼稚園からの帰り道の話によると、入植地では自分たちで仮小屋を建てるのだということでした。心配になり、駅のホームで汽車を待つ間に、そばにいた人へ思いきって聞いたところ、「あーそうだ」とぶっきらぼうに言うのです。どうしよう、私とチヨ子の女手だけで、どうやって小屋など建てることができるだろうか。しかし、開拓村に入らなければ住む所が無いのだしと考えると、胸がいっぱいになってきました。

その時、少し離れた所にいた斉藤さんという人が聞いていたらしく、近づいてきて、「おばちゃん、おばちゃん、何も心配しなくてもいいんだよ、みんなで建

てるんだから」と言ってくれたのです。この一言で、私の胸の重さは消えて勇気づけられました。そのときの斉藤さんが忘れられません。今、私があるのも、あのときの斉藤さんの励ましの一言があったからと感謝しています。

昭和二十二年三月、秋夫がシベリアからやせ細った体で帰ってきました。リンパ腺の手術をしたのだというので、汚れた包帯を首に巻いていました。

そのころ、チヨ子は年頃でもあり、早く嫁にやれと義姉に言われて、手放したくなかったのですが、致し方なく、風呂敷包み一つで嫁がせました。

義姉の家に一間を借りて、伐採夫などをして暮らしていた草刈信長という独り者がいました。義姉は私に、その人と一緒になれと強く勧めるのです。男手が無くては開拓村では大変だぞと言われて、私もいろいろ考えた末に、一緒になることを決心しました。

新緑の五月、私と夫と秋夫との三人で荷車にわずかな荷物と洋子を乗せて、チヨ子夫婦にも手伝ってもらい、約三十キロの道を一日がかりで移りました。

安達太良山の懐に抱かれた開拓地。大木が切り倒されたままごろごろとしていて、足の踏み場もないような所でした。畑を耕すのにも唐鍬で掘り起こすのですから大変な重労働でした。食糧も少なくて炊事をするのも悲しかったものです。開墾したばかりの畑に野菜の種をまいても、満州と違って肥料がないので、芽が出たと思ってもすぐに消えてしまうのです。掘っ立て小屋に、笹を刈って屋根をふいていたので、乾くと隙間から星が見えるのです。雨が降れば雨漏りどころか家の中に雨が降るので、夜などは一本の傘の下で四人が肩を寄せ合って、雨の止むのを待っていました。

開墾もしなくてはならないのに、お金が無いので、まず収入を得るために炭焼きをしました。冬の炭焼きは過酷なものでした。履物にも不自由をしました。薬が少ないので、短い藁靴を作って足にぼろ布を巻いて履くのですが、冷たくて痛くて、雪の中で足踏みをしながら働きました。

夕方、吹雪の中を洋子を連れてやっこの思いで家に帰ってみれば、家の中は一面に雪が積もっているの

す。隙間だらけの掘っ立て小屋だから、ランプの灯も消えるほど風が入ります。布団の上に筵をかぶせて寝たものです。

秋夫はしばらく入院していましたが、退院してからもろくに仕事もできないので、私は気が荒い夫からどなられてばかりいました。そのころ、秋夫は郡山に行っていました。

昭和二十三年秋、開拓者営農資金で十坪の家を建てました。畳も天井もなく粗壁のまま家具一つ無いので、家の中はガラーンとしていました。

昭和二十四年一月の寒い日、夫は寝込んでしまい、三月二十七日の明け方に亡くなりました。五十六歳でした。三年間一緒に暮らしましたが、婚姻届も出さなまま、どこの生まれの人だかも聞かずじまいでした。本当に我が家の犠牲者だったと思っていますし、我が家の土台を築いてくれた人であったと感謝もしています。

洋子と二人だけになってしまいました。そのころはまだ夜になると、狐の鳴き声も多かったものです。

四月になり、洋子も小学校に入学しました。部落の人たちみんな、ランドセルをプレゼントしてくれました。みんなよい人たちで本当に助けられました。

昭和二十六年春、またも人の世話で、樺太からの引揚者で仙台出身の菅原栄一郎と結婚。私は四十六歳、夫五十七歳でした。よく働く人で、次々と開墾して畑を広げて、食べ物に事欠くこともなくなってきました。

三 娘、洋子の思い出話

私は、約八キロの道のりを小学校に通いました。県道までの約二キロの細い山道は、私一人だけの通学路でした。そのころ、冬は雪が多くて、朝はだれも歩いた跡がない雪道を泳ぐようにして通いました。暖かくなれば、山道は木の枝や草が覆い茂って、朝露で履物や衣服が濡れるので、木の枝を持って露を落としながら歩いたものでした。そうした山道には、真っ赤なグミや黄色いイチゴがたくさんあって、ひとりじめできたものでした。帰りにはワラビ、ゼンマイなどが採りきれないほどあって、自然の恵みの楽しさを味

わうことができました。

小学二年生の終わりが、義父を迎えて三人家族になりました。まだランプ生活だったので、夕方はいつもランプ掃除をしていました。畑もだんだんと広がり、私も一生懸命に手伝いました。

そのころの農具といえば鍬と鎌だけなので、どうしても手が欲しくて、小学五年生のころからは農繁期になると、「学校を休め！」と義父に言われ、毎日家の手伝いばかりしていました。「勉強する暇があったら、家の仕事をしろ！」と常に厳しくて、夜は早くランプを消されてしまうので宿題もできず、もともと頭もよくないのだから成績も悪いのは当然でした。帰りが遅いと言われては叱られて、悲しい思いをしました。それでも学校に行きたくて、義父が朝仕事をしている間に「早く行け！」と、母は私を学校に行かせてくれました。そんな時、決まって母は叱られて、「洋子をなぜ学校へやったのだ、忙しいのに！」と、義父はどなっていたそうです。

義父は、働くときは骨身を惜しまずに働く人だった

のですが、酒を飲むと、夜も昼も眠らずに飲み続け、酒乱になる人で、私も母も家の中におれずに、近所の家泊めてもらったり、藁小屋で寝たりすることがたびびでした。

それでも母は、火事でもだされては大変だと、一睡もしないでお相伴をしていました。

大豆や麦類を大変な思いで収穫しても、販売した代金を酔っぱらって、そっくりなくしてしまったりで、骨折り損のくたびれもうけばかり多くて、借金はだんだんと増えてきました。出かければ必ず酒を飲むことに決まっていました。帰りが遅ければ心配で、母と二人で迎えに行ったことも再三でした。ほとほと酒飲みは嫌いでした。

私が中学二年生のころから、乳牛を飼いはじめたので、朝早く搾乳をして牛乳缶を背負って県道まで出してから、学校に走ったものでした。

中学校を卒業すると、当然の如くに一生懸命に家の仕事をしました。義父はだんだんと大酒飲みになって、村でも名物男になりました。母が体を悪くして人

院したときには、家族の少ないわびしさをしみじみ感じました。

昭和三十七年三月、ようやく開拓村に電灯が入りました。そして三十八年六月、私は二十一歳で結婚し、婿を迎えて四大家族となりました。義父の酒量は年と共に増えてきて、相変わらず嫌な暮らしでした。夫はどこに行ってもなんとか暮らせるから、母と三人でこの家を出ようと言いましたが、母は苦勞してやっと手に入れたこの土地を捨てたくないと言うのでした。家族の苦惱も知らない、わがまま放題の義父を恨みました。

そのうちに、病氣一つしないと日ごろ自慢していた義父も、心臓を悪くして入退院を繰り返すようになってしまい、発作の苦しみにあえぐ義父を一心に介抱する母でしたが、昭和四十五年九月二十三日、七十八歳で亡くなりました。

十九年間一緒に暮らしましたが、父親としての愛情は薄かったけれども、苦しさに負けない忍耐力を身につけさせてくれて、今はありがとうと感謝する気持ち

になっています。

昭和四十九年に家も新築し、次いで増築と欲張り、牛舎も建て乳牛もふえ、借金も全部返しました。

四人の子供たちを育てるのに、母に世話してもらい、私は夫と共に精いっぱい働きました。本当に母には感謝をするばかりでした。

姉のチヨ子も、平成元年三月に亡くなりました。貧困時代に五人の子供を育て、苦勞の連続でした。苦勞を知って成長した子供たちが力を合わせて家も建て、喜びに浸りながらも、過去のあまりにも無理な生活に命を縮めてしまったのです。秋夫兄も千葉で家族と共に平穩に暮らしています。

平成七年七月、中国からアイ子姉が、夫と娘の三人で永住帰国しました。中国残留孤児となり、五十年間をどんな思いで過ごしてきたのだろうかと、今更ながら離ればなれになって異国の地で生きてきた姉の苦勞に、涙するばかりでした。

アイ子姉と一緒にだったキミ子姉は、十八歳のとき、中国で亡くなったとのことでした。残念でなりませ

ん。

生死の分からない、吉秋、吉夫の二人の兄は、何の手掛かりも情報もないのです。だれかこの二人を知っている人はいませんか、私はいつも心の中で叫んでいます。

私たち親子の絆を裂いたこの戦争は、憎んでも憎みきれません。直接に戦争の記憶がなく育ってきた私は、自分ばかりが苦勞してきたと思ひ込んでいましたが、母や兄や姉たちに比べたら何と幸せ者なんだろう、母の愛をひとりじめできたのだからと、このごろになってやっと気付きました。

私が子供のころのこの山は、悲しく、辛く、わびしく、寒い思い出だけでしたが、次々と入植する家が増えて三百戸が生活するようになりました。山の畑も努力のおかげで肥沃になり、すべての作物がよくとれるようになりました。土地があるありがたさを実感しています。今ではこの地をこよなく愛しています。

しかし、ここに至るまでの苦勞は、母も私も絶対に忘れられません。

明治・大正・昭和・平成と苦難の連続の道を生き抜いて、やっと平穩な人間らしい生活に落ち着いた母は、私の宝物です。

今、母と共に思い出を語り合い、平和な日々を過ごせる幸福は、ただで得たものではないのです。あの戦争、そして引揚げの中で亡くなった多くの方々のお陰なのです。

この平和のありがたさを、世の人々と共に守り、維持することの大切さを痛感する毎日です。

私の悩み、いつまで続くのか？

福島県 加藤 トシ

一 満州へ

私は、大正十三年に福島県三和村で、加藤久一の次女として生まれました。私が八歳のときに母が亡くなりました。姉が十二歳、妹が四歳でした。母の死後は本当に寂しい思いをしました。父は、冬には遠くに働